慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文学の俗化： 文法学者ユルバン・ドメルグにおける文学言語の問題（１）
Sub Title	La vulgarisation de la littérature : question de la langue littéraire chez Urbain Domergue, grammairien
Author	國枝, 孝弘(Kunieda, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.47 (2008.) ,p.19- 40
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20080930-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈文学の俗化〉
——文法学者ユルバン・ドメルグにおける文学言語の問題(1)

國　枝　孝　弘

はじめに——ユルバン・ドメルグの歴史的位置づけ

フランソワ＝ユルバン・ドメルグ（1745-1810）は、フランスの言語学史において、忘れ去られたとは言えないまでも、長らく、革命の激動期の歴史の中に、半ば埋もれてしまっていた人物であった。ドメルグが活躍した18世紀後半は、古典主義は終わりをむかえ、ドメルグの言語についての考察も、もはや宮廷という閉鎖空間、アカデミー・フランセーズという国家制度からは離れたところで行なわれた。

ドメルグをポール・ロワイヤル文法に端を発する一般言語学の系譜に位置づけることは難しい。たとえばその系譜に属するコンディヤックの『人間認識起源論』について[1)]、ドメルグは、「よくできた言語」という考察に影響をうけながら、あくまでも「フランス語」という個別の一言語を対象にし、きわめて実践的な「文法論」を書いている。この点では、リヴァロルとも異なる。『フランス語の普遍性』は、フランス語という言語自体よりも、18世紀後半におけるフランス語のヨーロッパにおける地位を歴史的、社会的理由から説明したものであり、ドメルグがリヴァロルと同じように普遍言語としてのフランス語という考え方を持っていたとはいえ、その普遍性を強く訴える著作を書いたわけではない。

1）たとえば、Sylvain Auroux, *La philosophie du langage,* PUF, 1996, p.93-96を参照のこと。

ドメルグが理論と合理性という啓蒙思想に基づく考えを自分の基盤においていたことを考えれば、まずはフランス語史におけるピュリスム purisme の流れに位置づけるのが自然であろう。ピュリスムの発想は、革命期においてジャコバン派の言語政策と結びつくが、この交差点に位置するのがドメルグである。

事実、フェルディナン・ブリュノは大著『フランス語の歴史』第 9 巻で、バレールとともにドメルグをひき、国内における統一語としてのフランス語の普及の方策について言及している。ブリュノはドメルグのパリ市議会での報告を引用し、共和国としてのフランスの統一のために、国語としてのフランス語の統一は不可欠であるということ、またフランス語のヨーロッパへの普及が、同時に自由、平等、理性の普及を意味し、ヨーロッパの再生に寄与できるというドメルグの考えを紹介している[2)]。

とは言え、ジャコバン派の共和主義言語政策を語る際に、必ず言及されるグレゴワール、バレールに比べると、二人に少なからぬ影響を与えた、ドメルグへの言及は多くない。しかし 1980 年代に入り、特に、フランス革命 200 周年の 1989 年前後の革命期を対象とする社会言語学的アプローチの進展とともに、その名が挙げられるようになる。ドメルグが出版していた定期刊行物を始めとする、革命前からの第一次資料の掘り起こし[3)]、フランス革命研究における言語政策の検討などによって、ようやく本格的研究が始まった[4)]。

ドメルグは南仏のオーバーニュに生まれ、オラトリオ会施設で教育を受けた後、「無知修道士」のもとで自らも教育に携わる。その後、リヨンに移り住み、1784 年に同地で『フランス語新聞』（*Le Journal de la langue française,* 以下 JLF）の刊行を開始する。これは、フランスにおいて最初に

2）Ferdinand Brunot, *L'Histoire de la langue française,* Colin, 1905-1953, Tome IX, p.180-182.

3）例えば Brigitte Schlieben-Lange, *Idéologie, révolution et unformité de la langue,* Margada, 1996 を参照のこと。

4）その代表が Winfried Busse, Françoise Dougnac, *François-Urbain Domergue Le grammairien patriote (1745-1810)*, Tübingen /Narr 1992 である。

言語そのものを対象として出版された定期刊行物である[5)]。JLF は、パリに移住後にも、何度かの中断をはさみながら、革命期もふくめ、長期にわたって刊行され続けた。また 1791 年には「フランス語愛好者協会」という団体を設立する[6)]。これもフランスで初めて、言語を対象する協会であった[7)]。

このように、ドメルグという人物の重要性としては、その生涯にわたる活動が、オラトリオ会といった組織による教育の普及、定期刊行物の出版や協会の設立にみられる文化的な活動の隆盛、革命状況下における言語政策の具体的提言などを知る上で、格好の歴史的資料を提供してくれる点がまずは挙げられる。しかしそれだけではない。彼の言語についての問いそのものが、古典主義において完成をみたとされるフランス語、そのフランス語で書かれた文学が、18 世紀末の、啓蒙思想が広まる時代の変化の中で、どのように認識し直されたのか、それを知りうる手がかりを与えてくれるように思われる。

以上を踏まえた上で、本論の関心は、ドメルグの言語観における文学言語の位置づけにある。これまでの研究においては、言語の政治性という点にもっぱら関心がそそがれていた。文学言語に属するレトリックの問題も、革命の社会状況を受けた演説という言語機能の観点から論及されてきた[8)]。本論では、ドメルグが、文学言語にも、文法と同等の価値を与えていた事実をふまえ、理論と合理性という啓蒙思想を背負った文法学者が、時代の中で、どのように文学＝言語で書かれた作品の存在をとらえていたのかを考察する。さらに、文学を問うことは、作品を成り立たせている言語を問うことと同義である以上、文学言語へのドメルグの洞察を通して、最終的にはドメルグに

5）JLF のあらまし、歴史的位置づけについては Sylvain Auroux, Françoise Dougnac, Tristan Hordé, «Les premiers périodiques linguistiques français（1784-1840）», in. *Histoire, Epistémologie, Langage,* Vol.4 No.1 を参照のこと。

6）協会の変遷については Dougnac, «Les sociétés linguistiques fondées par F.-U. Domergue à Paris de 1791 à 1811», in. *Les Idéologues, Sémiothique, théories et politiques linguistiques pendant la Révolution française,* 1986. を参照のこと。

7）Busse, Dougnac, *op,cit.,* p.104.

8）例えば Jacques Guilhaumou, *La langue politique et la révolution française,* Klincksieck, 1989 を参照のこと。

とって言語とは何であったのか、この根本命題について問うてみることも可能であろう[9)]。

ドメルグと言語――『簡略フランス語文法』*Grammaire française simplifiée*（1778）

ドメルグの言語に対する問題意識が、革命前後を問わず終始一貫していたことは、最初の著作『簡略フランス語文法、あるいはつづり字論、発音と統辞についての覚書、批判的考察、作詩法新試論付き』を読むとよくわかる。1778 年に初版が出た後、革命期に入っても、版を重ね、一時は版切れになるほど売れた本であるが[10)]、ドメルグ自身が、この本を再版し続けた理由の一端は、時代が変わっても著作内容の有効性が変わっていないと確信していたことに求められる。19 世紀に入ってから書かれた著作をみても、ドメルグのフランス語観にほとんど変化は認められない。ではそのフランス語観とはどのようなものであっただろうか。まずは、序文の一番最初に書かれた本の目的をみてみよう。

> 基本書というものは抽象的な作品であるよりも理解可能な作品でなくてはならない。我々の言語（フランス語）の原理についてはデュ・マルセ、ジラール、ボーゼーのような人々にまかせよう。（中略）私は、偉大な栄光は望み得ない代わりに、大きな有用性を目的とした[11)]。

ここに名前が挙げられている人物は、ドメルグによれば、抽象的な言語理論を展開する、「文法哲学者」に分類される。それに対して、この本の根本

9）紙幅の関係から、本稿では JLF だけを分析対象とし、もうひとつ重要なテーマである、ドメルグのアカデミー・フランセーズに対する立場については、別に論を改めたい。

10）『簡略フランス語文法』が版を重ねた状況については、Busse, Dougnac, *op.cit.* p.61.

11）*Grammaire française simplifiée,* p.V.

にあるのは、「有用性」である。この現実的な価値こそが、本書の目的であるとドメルグは言明する。理解しやすく、役に立つ文法書を世の中に出すことが自分の使命なのだ。では、実際、誰にとって理解がしやすく、役に立つのだろうか。ドメルグ自ら、著作の中で次のように述べている。

> 男女を問わず若い人々の知育（知識の伝授）にむけた著作[12)]
>
> 私は、すべての教師にこの試みの完成にむけて協力していただきたいと誠心誠意願う次第である[13)]。

つまり、この文法書はこれから知識を身につけていく若者に、またそうした人々を教育していく教師にむけて書かれている。18 世紀を通じて、フランス語の知識を、教養としてよりも、より実用的な知識として求める層が生まれていたのである。そして、この要求を満たすためには、特段の知識を前提とせず、簡潔で正しい規則・規範を、わかりやすく提示する必要があり、ドメルグの著作はその期待に応えていたと考えられる。

『簡略フランス語文法』は、「文字」（＝正書法）、「語」（＝品詞分類）、「つづり字記号」、そして「作詩法」の四部に分かれている。その中で、中心を占めるのは正書法である。序文でも、この本を書いた動機は、「つづり字の難しさを訴える声をよく聞いていた」からだと書かれている通り[14)]、最も大きなテーマはこの「つづり字」の説明である[15)]。

「正書法」の命題は「正しく書く」につきているが、具体的な方法論は次の 2 点にまとめられる。(1) フランス語の内部での解決、(2) 音とつづり字の一致の優先。

12）*Ibid.,* p.IV.

13）*Ibid.,* p.VII.

14）*Ibid.,* p.V.

15）フランス語史研究におけるつづり字の概略については、Claire Blanche-Benveniste, André Chervel, *L'Orthographe,* Maspero, 1969 を参照のこと。

(1)フランス語の内部での解決とは、ラテン、ギリシア語に依拠しない、フランス語自体での規則の規範化を意味する。ドメルグは、「古典主義の文法学者たちは、あまり考えることなく、我々の言語の本質をラテン・ギリシア語においてしまった」[16] と批判し、フランス語を、古典語から切り離し、その内部だけで完結する説明を与えようと試みる。たとえば語末の子音字について、本来ならばその語源に遡り、ラテン語の対応する単語から、その子音字の残存の理由を述べるわけだが、ドメルグはフランス語の語彙の中に存在する派生語を列挙することで、その単語に発音しない子音字があることを示すべきだとする[17]。sang の g を書くのは、その語源であるラテン語の sanguen に遡って説明するのではなく、sanglant や sanguin などの派生語によって説明するといった具合である。つまり、読者（学習者）に、ラテン語の知識がなくても、フランス語が正しく書けるよう考慮されている。大切なのは、古典の教養を身につけることではなく、市井の人々が、この書を読んだ後に、「正しく」フランス語を書けることなのだ。このフランス語内部での規範化、ラテン語との決別は他の章でもみられる。たとえばポワティエで出版された辞書に appeller のような綴り字が残っている事実を取り上げ、こうした間違いは、ラテン語の appellare に起因し、語源的には正しくても、その語源が発音とつづり字の実際上の矛盾を引き起こすようであれば、現在の発音にあわせるのが正しいとする[18]。このようにフランス語は、死語となったラテン語を模倣する必要はもはやなく、生きて使われている自らの内部に自律した法則を定めることがドメルグの主眼である[19]。

16）*Ibid.* p.71.

17）*Ibid.* p.37.

18）p.9.

19）例えば、アカデミーが語の起源を知るため、旧来の正書法を踏襲した事実と対照的である。cf. «Préface de la première édition -1674 du dictionnaire de l'Académie française.» *Les Préfaces du Dictionnaire de l'Académie française 1694-1992,* Honoré Champion, 1997, p.33. また、18 世紀後半にラテン語教育に疑問を投げかけていた思想家（例えばダランベール）たちと軌を一にする。Cf. Daniel Baggioni, *Langues et nations en Europe,* Payot, 1997,（『ヨーロッ

(2)音と文字の一致の優先については、慣用による旧弊を改め、理論に則って発音とつづり字の関係を適用する立場をとっている。つづり字を簡潔にし、規範化をめざす合理主義的な態度には、啓蒙主義者ドメルグの言語観の一端がみてとれる。簡潔化と規範化の関係について考える際に、フランス革命期に定着しはじめた半過去（ex. j'étois）と国名（ex. Anglois）の oi のつづり字を ai に変更する問題についてのドメルグの見解は示唆的である[20)]。ドメルグは、ヴォルテールによるこのような提案が、発音の現状に合致したものであること自体には賛意を表明する。しかし、彼の考えの根本は、「慣習」という実状にあわせたフランス語の整備ではなく、理論に合わせた、つづり字自体の簡略化、明晰化にあった。理論が慣習として定着することが言語規範のための改革の望ましいあり方である[21)]。そのため音とつづり字の一致に対しては賛成しながらも、単音に対して 2 文字で表記するのでは、完全な一致とは言えないとする。ドメルグが目指したのは完璧な音表文字体系の作成であり、これは数十年を経て実際に作成された[22)]。

しかし、「音と文字の一対一対応」の提案は、すでにこの時期にもみられる。たとえば ch のつづり字の発音が 2 種類あることは改良の対象になる。ドメルグは「シュ」の音は通常通りのつづり字で、「ク」の音は、h の右下を内側にカーブさせて書くことで両者を区別することを提案する[23)]。音と

パの言語と国民』筑摩書房　2006 邦訳 p.227）.

20）p.54. oi から ai へのつづり字の歴史的変遷については Blanche-Benveniste, Chervel, *op.cit.,* p.69. を参照のこと。

21）Busse, Dougnac, p.64. Cf. Blanche-Benveniste, Chervel, *op.cit,* p.100. «Le Siècle des Lumières ne pouvait manquer de défendre contre les tyrannies de l'usage le point de vue de la raison, et nombreux sont d'un bout à l'autre les projets de simplification（...）»

22）それが 1800 年に出された、*La Prononciation française, déterminée par des signes invariables, avec application à divers morceaux, en prose et en vers, contenant tout ce qu'il faut savoir pour lire avec correction et avec goût* である。ここでは懸案の ai は è で綴られている。«AUTANT de signes que de sons, ni plus ni moins»（p.7）という原理が貫徹されている。

23）p.15.

つづり字の関係が簡素化できるならば、新たな文字を提唱することも厭わないのである。

ちなみにこの音とつづり字の関係については、ドメルグは終始一貫した関心を持っていた。ドメルグは、1795 年の JLF で、文学作品をまずは通常のつづり字で、次に発音を忠実に反映したつづり字を用いて出版することを構想した[24)]。1796 年の『普遍記号によるフランス語の発音』では、「つづり字を改良する前に、まずは発音を固定しなくてはならない」と主張する[25)]。そして「多くの県の悪しき発音を矯正し、正しいつづり字の基礎を作り上げるための書物」として、自著『簡略フランス語文法』を挙げている。こうした発想を持ったのも、すでに革命以前から、ドメルグが「音とつづり字」を改良し、完全なる一致のために理論による言語改良をもくろんでいた必然的な帰結であろう。

以上二つの例をあげ、『簡略フランス語文法』の特徴を述べた。あらためて、初期におけるドメルグの言語観を、その時代の状況、思潮と考え合わせながらまとめておく。

一つめは、ドメルグにおける言語への問いは、形而上学的な問いではなく、人間が社会生活において用いている言葉そのもの、人間が「道具」として用いる言語そのものを問題にしたと言える点である。より具体的には、フランス語という個別言語の発音・つづり字・文法規則の整備である。この意味で、ドメルグの著作は一般言語学からフランス言語学へという 18 世紀の言語史の流れ、18 世紀全般を通して顕在化した「言語の文法化」[26)] の流れの中に位置づけることができるだろう。

二つめは、この具体的考察が、言語の実用性に結びついているという点である。言語についての考察は、言語そのものの探究ではなく、もっぱら読み書きに役立つという見地にたっている。言語によって知識を身につけ、他者

24）JLF III, Art d’écrire :1-4, cité par Busse et Dougnac, p.116.

25）Cité par Busse, Dougnac, p.157.

26）Cf. Jacques Chaurand, éd., *Nouvelle histoire de la langue française,* Seuil, 1999, p.335. Baggioni, *op.cit.,* 邦訳 p.110。

と交流をはかり、社会の共同体を構築していく。そうしたナショナルな言語観に結びついているのである。この実用性とナショナルという言語観は、「言語の均一性」と「言語の完成」という 2 つの考えを内包している。道具が、より使いやすいように不断に改良されていくように、言語も「進歩と普遍」の道を歩む。均一性を目指すということは、言語という道具が、コミュニケーションという目的をスムーズに遂行するための手段と化すということであり、優れた道具であればあるほど、万人に浸透し、共通のものとして広まっていくのである。

ドメルグにおいて、フランス語の分析とは、まさに「フランス語」という単一の対象を分析するということであって、言葉のレベルは問題にならない。ドメルグはフランス語の品詞を分類し、次のように言う。

> これ（品詞分類）が基盤となって、その上にフランス語という建築物全体が成り立っているのである。話し言葉も、書き言葉も、民衆の使う俗語であっても、演説家や詩人が使う洗練された高貴な文体であっても、ひとつの建築物なのだ[27)]。

このようにフランス語は、ひとつの構築物であり、逆に地方語は、言語の均質性の浸透を阻む存在となる。

> それぞれの地方が、言語に関する悪弊を持っている。これは首都にも言える。私は、それぞれの地方の教師が、生徒のために、その地方性が原因として認められる誤用を一覧にしていただきたいと考えている。これこそが悪弊を根こそぎにする確実な方法であり、こうすることで、悪弊は、そのもともとの原因である無知とともに消え去ることであろう[28)]。

27）*Grammaire simplifiée,* p.62.

28）*Grammaire simplifiée,* p.162. Cf. p.50.「地方は古い発音をずっと保っており、それより優れたものをなかなか採用しようとしない。」

首都も含め、フランス国土に言語の差異があることは、言葉の透明度を落とし、伝達を滞らせ、知の波及を遅らせる原因となるものである。ジャコバン派の言語政策を 20 年近くも先取りするような発言であり、ドメルグという一人の人物の生き方に、ナショナルな空間の確立のプロセスが見えるかのようだが、彼の中には、言語政策としての具体的な提言というよりは、まずは「言語の改良」という理論化の意志があった。

そして、言語の均質性とは、言語の完成ということと、ほぼ同義をなしている。地方語だけではなく、我々が実用の意図のもと使っている言語自体も完全なものではない。数々の誤りや、慣用を含みながら、我々は言語を用いている。しかし矯正は可能であり、法則化によって、必ず完成へと導くことができるのである。言語が完成をみた暁には、均一である故に、誰もが等しく、正確に話せるものとなり、そうなれば、社会の均質性も必ずや実現できるのである。夢のような理想もドメルグの熱意の中で現実化への営みとなる。

このような言語の均質性と言語の完成というドメルグの言語観の基底をなす志向は、彼の文学言語に対する考えにおいても無縁ではないだろう。なぜならドメルグにとって、言語はレベルを問わず一つの言語だから。また、ドメルグの立場から見れば文学自体にも、完成された規範となる作品があり、こうした作品を分析すれば、内在する法則を抽出することができ、すべての人が、それを優れた道具として利用できるはずである。このような仮定に基づき、以下、実際に JLF を例にして、ドメルグにおける文学言語の位置づけを考えていきたい。

Le Journal de la langue française における文学（第一期 1784-1788）

1784 年 9 月 1 日、ドメルグは、JLF の第一号を刊行する。すでに述べたように、フランスにおいてフランス語そのものを対象とした初めての定期刊行物である。とは言え、文学や文学批評が排除されていたわけではない。事実、刊行物の正式なタイトルは *Le Journal de la langue française, soit exacte, soit ornée* であり、2 種類の言語が考察の対象となっている。第 1 部は、langue exacte「正確な言語」、すなわちフランス語の正確な用法、文法

がその対象となる。第 2 部は langue ornée「飾りの言語」、こちらは、文学（散文と詩）的な文章が対象である。では JLF は、具体的にどのような指針に基づいて、これら二種類の言語について書かれていたのだろうか。第一号の巻頭文を読みながら、その指針を具体的に検討することにしよう。

> 明確な原理的探求にのっとり、他を排除せずとも、全く新しい文法体系を作り上げること、書き言葉、話し言葉に関しての様々な質問に答えること、論拠のある、有益な批判を行なうこと、散文であれ、詩であれ、趣味のあらゆる作品の簡潔にして明確な理論を提示すること、才能の印の認められる作品だけを、知らせ、分析し、集めること、神の言葉の中に、人間にとって注意を引くに値する、道徳的、物理的そして政治的出来事を認めること、これがジュルナル・ド・ラ・ラング・フランセーズの計画である[29)]。

JLF には大きくわけて 2 つの目的がある。ひとつは「正確な言語」に分類される事柄で、「新しい文法体系」を作り上げること、それと同時に「文法上の規範」を示すことである。つまり言語そのものの正しい使用に関係する事柄である。ドメルグによれば、現存する文法書の多くは、扱う言葉が古く、現在使われている言葉について考察するには適さない以上、今の時代の言葉に対応する、文法書を作り上げる必要があると言う。この体系を打ち立てるという意志は、例えばヴォージュラのように、良き慣習に任せて、フランス語の純正なことば使いの記述につとめるというような言語観とは対立する。ここには、理性の重視、すなわち、いかに明白な規則、法則を打ち立てるか、という啓蒙の時代の人物らしさがうかがえる[30)]。事実、この第 1 号においても、「人間を啓蒙することは、人間をより良きものにすることであ

29）JLF I : 8-9（I-1, 1er septembre, 1784 : 1-2）

30）Busse, Dougnac, *op.cit.* p.49. Vaugelas の言語観については、Marc Fumaroli, «Le génie de la langue française», in *Les Lieux de mémoire,* Gallimard, 1992（1997）, p.4656. を参照した。

る」、「理性が人間の導き手であるように」といった言述がみられる。

もうひとつの目的は、「飾りの言語」に分類される事柄で、「あらゆる趣味の作品」を理論づけ、文学における「趣味」goût の規範を示すことである[31)]。ドメルグは、第一号の表紙で、「正確な言語」、「飾りの言語」、それぞれに 5 つずつ項目をたてて内容を説明しているが、「飾りの言語」の最初の項目は、「趣味の作品に関する一般的、そして、個別的な理論」となっており、ここでも「趣味」の理論化について言及がなされている[32)]。

このように、JLF はその半分を文学言語の考察に割いている。その文学言語とは「趣味の作品」に用いられる言語である。古典主義において、文学という創造物にたいする批評原理は、言語そのものの規範的使用に密接に結びつき、17 世紀の作家たちの偉人化、アカデミーという制度的存在によってその絶対性を保証してきた。言語の規範化という意味では、ドメルグの文学言語への問いは、少なくとも形式上は古典主義の伝統に立脚していると言える。事実、第二部「飾りの言語」において考察されているのは、ラテン語詩の翻案としてのフランス語詩、アカデミーで賞を得た作品の紹介、モデルとされる「祝詞」、「弔辞」といったディスクールの紹介、そして文法的な誤用の指摘である。

このように内容のみを概観すれば、確かにドメルグの文学言語は古典主義の範疇におさまっているようにみえる。しかし、「趣味」の内実、「モデル・規範」を示すというドメルグの意図をもう少し詳しくみるならば、そこには 18 世紀後半における古典主義の終焉と啓蒙思想の台頭という価値観の転換が浮かんでくる。この問題を詳しく検討するために、「飾りの言語」について詳しく説明されている JLF 第一号第二部の冒頭文を読みながら、ドメルグにとっての「趣味」とは何か、その基準とはいかなるものであったのかを

31）ヴォルテールは『哲学事典』で、文学とは ouvrages savants ではなく、これからは ouvrages de goût をさすべきだとしている。つまり、啓蒙の時代において、文学とは「趣味」の判断基準によって成立する創作物をさすようになったのである。

32）JLF I : 7（I-1, 1er septembre, 1784 : première et deuxième pages de couverture）

考えていく。

「飾りの言語」の定義の中心を占めるのはここでも「趣味」である。ドメルグは「飾りの言語」の完成までの道筋を4段階にわけて説明する[33)]。それは「自然」から「理性」への移行であり、最終的には「自然」と「理性」の調和である。第一段階は、ある種直観的、本能的な状態にとどまっている「趣味」の段階である。考えを他者に伝えるという欲求に基づくだけの、言語の始源の段階、ほとんど自然の状態で、まだ文体的な配慮とは言えない状態である。たとえば、荒々しい音を避けたり、複数の単音節から構成される語を用いること、あるいは何らかの省略を行なうこと、これらが「飾りの言語」の第一歩である。第二段階は、人間の想像力によって、「飾りの言語」の領域が拡大されていく段階である。比較やメタファーといった技巧によって、言述がより活気を帯びる段階である。しかしドメルグは、ここまでの言語とは、瞬間的で、ひとつの技巧として形式化されたものにはなりえていないとする。第三段階は、この瞬間的なものに過ぎなかった効果を、感情によって持続的なものにする段階である。感情は、擬人法、修辞疑問などの技法によって「飾りの言語」を豊かにすると同時に、そのことばを魂に刻み込む。最後の第四段階は、考察の段階である。最初の自然の状態と、考察によって作られた「モデル」の間を行き来することにより、「飾りの言語」は完成をみる。このとき「本能の状態にとどまっていた趣味」は、「理論的な趣味」へと変わる。想像力は法則の存在を認めることになり、感情はその限界を知る。この段階に至って、傑作とされる文学作品は生まれるのである。ドメルグにとって、趣味とは、文学作品の創造における、本能や、想像力、感情といったレベルのものではない。そこに考察を加えることによって、「モデル化」、「理論化」できる尺度なのである。

では、「趣味」の「理論化」とはどのような事態を意味しているのか。この問題を考えるにあたり、まずは18世紀における「趣味」の重要性を確認しておきたい。中川久定によれば、18世紀の批評において、「趣味」は、批

33）JLF I : 8-9（I-1, 1er septembre, 1784 : 20-22）

評の原理であり、この批評の意味の転換に批評原理の転換をみることができるとする[34)]。「趣味」は、古典主義文学の完成とその退潮を、そしてロマン主義の誕生を示唆する重要な概念である。中川は、この転換の諸局面を、18 世紀全般にわたって様々なテキストを綿密に追いながら検討しているが、本論において、特に重要な意義をもつのは、ヴォルテールの「趣味」から、マルモンテルの「趣味」における転換である[35)]。以下、中川の論考に基づき、この転換を整理したい。

ヴォルテールの最初の文学・芸術批評である『趣味の神殿』は、「『伝統』、『規範』がまだ『趣味』の名で絶対化されている[36)]」ことを示す作品である。中川はこの作品におけるヴォルテールの批評原理を次のようにまとめる。

> この作品におけるヴォルテールの「批評」の原理とはなんであろうか。「批評」の「女神」は、ある作家（フォントネル）に向かって語る。「私がこれから申し上げることは、この趣味の神と、一般読者と、私自身とを代表した意見なのです。私たち三者の考えは、時がたてば結局は一致するのですから」。
>
> この趣味の「批評」は、規範としての趣味に支えられ、その「趣味」を担う実体が「一般読者」なのである。(「趣味」の絶対的規範的性格は、「趣味の神」という表現によって明らかである。また、ここで「一般読者」と呼ばれているものが、実はヴォルテールが、出入りしていたサロンの少数の、選ばれた仲間を指していることも断る必要はないであろう。[37)]

ここで着目したいのは、趣味とは「絶対的な規範」であり、その規範は、

34）中川久定「批評の原理の転換―規範としての＜趣味＞から経験としての＜趣味＞へ」、フランス文学講座 6『批評』（大修館書店　1980）

35）*Op.cit.* p.58.

36）*Ibid.*

37）*Ibid.* 61.

「選ばれた仲間」だけに共有されているということだ。ヴォルテールの批評は、いまだ古典主義に立脚したものであり、サロンという閉じられた社交の空間だけを相手にするに過ぎなかった。

それに対して、マルモンテルにおいては、この「一般読者」の定義は飛躍的に拡大する。中川は『百科全書』第四巻に載せられた、マルモンテルが執筆した『批評』の項目について検討している。マルモンテルは批評家を「優秀な批評家」、「凡庸な批評家」、「無知な批評家」にわけ、「優秀な批評家」とは、その「想像力」によって個々の作品を越えた「超越的なモデル」を構想することができる人物であり、この批評能力は、「無数の試練」を経ることで、身についていくと言う。その意味で「趣味」判断は、「経験的」であり、それはすなわち、判断における主観の判断が重視されているということである。そしてこのような批評家は、マルモンテルによれば、「一般読者」にうちにいるのだが、中川は、この「一般読者」について次のように指摘する。

> おなじ「一般読者」ということばを使いながらも、ヴォルテールはそれによって上流社交界を意味し、マルモンテルは、より広く啓蒙されたひとびとの集まりを指しているという、このニュアンスの違いに注目すべきである[38)]。

批評原理を担うのは、ある選ばれた人間たちではない。人間は階級によってあらかじめその能力が決められているのではない。人々には、啓蒙された段階においては、批評を行なう能力が十分に備わるのだ。マルモンテルの批評は、啓蒙された人々の共同体を考えていること、想像力という個人の能力に言及していることもふくめ、すでに古典主義の制約を抜け出し、主観的な経験としての「趣味」に一歩踏み出していると言える。

以上、中川の論考に沿ってヴォルテールからマルモンテルにおける趣味の

38）*Ibid.* p.64.

判断基準の転換を概観した。この転換において、趣味とは絶対的な価値基準ではなく、啓蒙された（される）人々が、「長い時間と努力」をかけて、打ち立てる規則となる。では、ドメルグにおける「理論化された趣味」は、どのように位置づけられるだろうか。

まず着目すべきなのは「趣味」を担う実体である。ドメルグが想定するのは、定期刊行物の読者という不特定多数である。この読者層は、一部の特権階級の集まりではない。実際、JLF に載せられた王立検閲官の手紙によれば、JLF は「これほど出版物があふれているのに、フランス語をよく話す方法は持ち合わせていない」人々に対して、その「必要性」、「実用性」を満たしてくれるものだとしている[39)]。つまり JLF はフランス語を必要とする全ての人々をその対象としているのだ。より具体的に、ドメルグは想定しうる JLF の読者として、「教養ある家庭の父親、教育に携わる長、文人、王族」を挙げている[40)]。階級を問わず、「啓蒙された人々」が実体となるという意味で、ドメルグはヴォルテールの古典主義的規範を抜け出し、マルモンテルに近づいていると言えよう。

しかし、趣味判断の基準という点では、ドメルグとマルモンテルの方向性は異なる。後者の主張における経験的な性格というものが、前者においては、重要視されていない。確かに、ドメルグにおいて、「想像力」や「感情」も「飾りの言語」、すなわち「趣味の判断基準」を構成するものであった。しかし、それはあくまでも「本能的な趣味」にすぎず、これらの趣味の判断基準では、傑作を生み出すには不十分であった。そのため、ドメルグは「飾りの言語」に「考察」を加えて「モデル化」しなくてはならないという。このモデル化とは、それを求めるすべての人々の手に届けられる普遍的な規則ということである。趣味はもはやヴォルテールの言うような、超越的な絶対価値基準でもなく、マルモンテルにみられた個人の主観、経験へと還元されえるものでもない。中川は、論の最後で「批評」原理の転換の４つの条件を挙げ、

39）JLFI : 97-98（I-11, 1er février, 1785 : 361-363）, cité par Busse, Dougnac, p.58.

40）JLFI : 215（Ⅱ-15, le 15 août 1785）

「批評」の媒体としての定期刊行物の増加を挙げている。JFL もその中の一冊に数えることはできるだろう。しかし、「テクスト分析、作品が読者に与える芸術経験の個人心理学的・社会学的分析」、すなわち「経験としての趣味の分析」を行なうためではなかった。

ドメルグが JLF を刊行するのは、広い読者層を対象として、「経験」による読み、「個人」の批評を開陳するためではなく、むしろそうした読みや批評を可能にする批評原理＝「趣味」を「道具」として提供するためである。「理論が簡潔で明確である」とは、そのような「道具」を求めている人々にとって、理解可能、受け入れ可能であるということだ。さらにもう一歩進めて言うならば、趣味の実践者はもはや限られた一握りの人々ではない。理論さえ身につければ、誰もが趣味の判断基準を身につけることができ、創作や批評が可能となる。いわば、「個人心理学的・社会的分析」を行なう、その一歩手前で、分析のための手ほどきをしていると言ってよい。これが定期刊行物を通しての、ドメルグによる啓蒙思想の具体的実現形態なのである。

ドメルグにとって、趣味はモデル化が可能であり、モデル化が可能であるということは、人は、それに沿って趣味の判断基準を多かれ少なかれ身につけることができるという意味であった。これは、文学において「正誤」の判定ができると言うのに等しい。ここにきて文学言語は、「学びうる」規範として把握される。規範を経験の方へ、主体の判断の方へ移行させるというよりも、趣味そのものを「俗化する」ことにドメルグの主眼があったと言える。言語を明晰な論理にそって分析することさえできれば、我々はそれを学習の対象とし、趣味を理論として身につけることができるのである。この考えは、フランス革命が勃発し、世の中が不穏な状況に陥っていた時代に再開された JLF 第二期において、さらに顕著に現れてくる。

Le Journal de la langue française における文学（第二期 1791-1792 と 1975 年まで）

1791 年 1 月 1 日パリで再開された、第二期 JLF の内容は、憲法の制定にむけて動き出していた時代の状況を反映し、議会の演説を文法的に分析する

など、革命の言述を対象にしたものが多く見られる[41)]。このような特色があるものの、第二期の JLF でも、「正確な言語」、「飾りの言語」の構成は保たれている。では、この時期「飾りの言語」はどのように位置づけてられているだろうか。ドメルグ自身の JLF の紹介文を読みながら、その意図を考えていく。

> 私の意図は、趣味の作品に対しても、言語の純粋性のために自分が行なったことを、検証することにある。この第二部では、第一部で論理に基づく文法を提示したのと同じように、理論的な修辞法と詩を提示することになる。正確な言語とは、例外なく全員がその有用性を認めている言語である。偉大な作家たちは雄弁と詩の魅力で理性をより美的なものとし、それによって理性を愛させ、その影響を広げる。飾りの言語は、あらゆる公的機関にとって有益であり、物事の秩序が改まり、市民の集まりで発言をするようになる若い人々にとっても、書く技術の秘訣を知りたいと思っている人なら男でも女でもやはり有益である[42)]。

従来、革命期の政治言語に関する研究では、言述におけるレトリックの価値もその主要な研究対象であった。例えばストゥカードは、この箇所を引用し、革命期において、「正確な言語」と同等の価値を持つものとして「飾りの言語」が扱われており、修辞法が革命期においても依然として尊重されていた側面を強調する[43)]。ギロムーは、この時期にフランス全国において、革命に奉仕する愛国的な団体が増加した背景から、JLF がそうした協会において演説活動をする人々に特に向けられているとし、ドメルグの関心は、こ

41）Auroux, Dougnac, Hordé, «Les premiers périodiques linguistiques», in. *Historiographica linguistica,* 1982, p.121.

42）JLF II : 41（I-4, 22 janvier 1791 : 133-136）

43）Agnès Steuckard «Laconisme et abondance : deux modèles pour le discours révolutionnaire»（2006）（http://revolution-francaise.net）

うした革命に関係する演説者の教育にあったと指摘する[44)]。

このように、革命期における政治言語としてのレトリックと演説、また革命精神の遂行の要素としての言語改革の必要性が、ドメルグという文法学者の中心課題であったことは明らかである。しかし、ドメルグの意図は、政治的な場だけにとどまるわけではない。

ここで今一度前掲のテキストを整理すると、1)「飾りの言語」を考察するにあたり、趣味の作品を扱うことと、言語の純粋性を扱うということは等しい価値をもつ、2)「飾りの言語」の対象はレトリックとポエティックである、3)「正確な言語」も「飾りの言語」も、ともに「有用」である、とまとめられるだろう。「正確な言語」が有用であるという意味は、この序文でも明らかなように、「簡潔で明快で豊かな原則」を打ち立て、誰もが依拠できる文法体系を提出することを意味する。では、言語の純粋性と同等に扱える「飾りの言語」が有用であるとはどういう意味なのだろうか。ひとつはギロムーの指摘通り、政治言語としてのレトリックの有用性ということが挙げられる。しかし、これに続く文章を読むと、さらに別の意味で読者の啓蒙を念頭においていることがわかる。論理にのっとった体系を示すことによる趣味の俗化である。

> そうした（書く技術を身につけたいと思っている）人々の才能が、彼らを作品の創作へと導く場合もあれば、彼らの趣味により、作品の鑑賞者に留まる場合もあるだろう。誰もが散文においては、トマ、レイナル、セヴィニェのように、韻文においては、ラシーヌ、モリエール、ヴォルテール、パルニのように創造ができるわけではない。しかし、誰もが自分自身で判断ができるという希望によって活気づき、こうした自分への愛が教育の法となるのだ[45)]。

「飾りの言語」で目的とすることは、誰であっても趣味の法則を身につけ

44）Guilhaumou, *op.cit.,* p.71.

45）JLF II : 41（I-4, 22 janvier 1791 : 135）

ることができ、それによって創作の原理を理解し、たとえ実際には創作にまでは至らないとしても、少なくとも批評へと向かうことはできるということである。これが「有用」であることのもうひとつの意味である。ドメルグにとって「文学作品」は、あくまでも「文学言語」のことであり、その「文学言語」には、「正確な言語」における文法同様、規範性がある。それをできるかぎり簡素で、明確な理論として提出することにJLFの第二部「飾りの言語」の意義があるとする。ただしその第二部の内容は、実際には第一期と同じく、理論分析というよりも、実作品の紹介が中心を占め、文体理論というよりも、文章中の「誤用」の指摘が目につく。つまり手本となるべきモデルの提示と、文法的観点による正しい言語使用のための規範の提示が、あらゆるフランス語使用者にあてた、ドメルグの言う「趣味」形成のための核心である。この点については前述のパリ市議会における報告書の中でも、言語の均質化の方策の一つとして「有名な作品の文法的分析」が挙げられている[46)]。その意味は「（雄弁の）技術は才能ではなく、学習によって身につける」[47)] ことにあり、抽象的理論としての批評原理を打ち出すこと自体が目的ではなかったのである。

1795年のJLFの第三期においてもこのドメルグの実践的姿勢は変わっていない。JLF第三期には「飾りの言語」に該当する項目として、「偉大なモデル、すなわち記憶を豊かにし、趣味を養うのに適した作品の考察を通じた散文と韻文の書く技術」[48)] が挙げられている。ドメルグはパリ市議会における報告書においても、「作品を鑑賞することから、それをまねしてみること」が演説の技術を得る上で大切であると説いている[49)]。フランスが革命期に入り、ドメルグという文法学者において文芸の「趣味」は、モデルの模倣と言語それ自体の正しい使用によって、誰もが身につけられるもの、誰も

46）«Adresse aux Communes et aux sociétés populaires de la République»（Busse, Dougnac, *op.cit.,* p.185）

47）JLF II : 42（I-4, 22 janvier 1791 : 137）

48）Cité par Busse, Dougnac, *op.cit.* p.115.

49）«Adresse aux communes...,»（Busse, Dougnac, *op.cit.,* p.186）

が実践できるものとなった。また文学作品は、人々が自らの言語を肉付けする、あるいは教養を高めるための題材となった。これは個人の趣味の主観化、多様化とは異なる、「趣味の俗化」と呼んでよい事態である。

おわりに

このようにドメルグにとっての文学とは、「正確な言語」と同等に扱える表現技術の対象物である。文学は作品そのものとして鑑賞されるのではなく、自らを構成する言語へと解体されている。それだけではなく解体され、部品と化した言語を使えば、つまりその組み立て方がわかっていれば、文学的言述は、才能ではなく、技術によって習得可能なものとなるのだ。

このような立場にドメルグがたてたのは、単に彼が文学者ではなく、文法学者だったからというだけではない。ドメルグの意識には、ギロムーが指摘するように「語の本質」への確信があった。「語の本質がなければ本当の雄弁はない」と言う彼の言語観には、語は観念を正確に表さなくてはならないという確信があった[50)]。1791 年 11 月 5 日の JLF で、アカデミー・フランセーズ辞書に取って代わりうる辞書の編纂にむけて、ドメルグは次のようにいう。

> よくできた言語なしには、正しい考えは生まれない。正しい考えがなければ、幸福はない[51)]。

語と観念の正確な一致、言語の透明性への確信は、「飾りの言語」＝文学言語に対する認識においても同様である。言語の使用者が自らの用いる語の本質を理解し、誰に対しても意味を取り違えることなく、言語を道具として取り扱える。そのためには、言語を誰にとっても完璧に使える道具へと仕立てなくてはならない。そのためにドメルグは、辞書の目的を次のように明言する。

50）Guilhaumou, *op.cit.*, p.70.

51）JLF II : 41（I-4, 22 janvier 1791 : 135）

（この辞書は）言語を完成へと導き、読者の教化と喜びに寄与する。

この言葉は、辞書の語彙だけでなく、また、文法という「正確な言語」だけでもなく、言語そのものに対するドメルグにとっての第一の命題であったのではないだろうか。彼にとっては、文学とは天才が新たに作り出す創造物ではなく、だれもが作り上げることが可能な言語構築物なのである。文学とは神秘ではない。それは、誰にとっても理解可能な全き明晰性・規範性のもとに構築されているのだ。ドメルグにおいて文学は言語の完成に寄与する一表現形態に過ぎない。そして、万人による文学の創造の可能性、これこそが啓蒙の時代、論理と理性の時代を象徴するような文学のあり方である。自由と平等を標榜するという意味においては民主主義的という表現も許されるであろう、ドメルグの著作は、文学という今までは制度的に守られてきた知識が拡散していくことに寄与していくのである。